

セクター分析（産業別利益動向）

	前回	今回	コメント
鉄鋼	 -----	 -----	高炉は日系自動車・造船メーカー等へ的高级鋼の販売数量増が続き需給はタイト。しかし主原料の鉄鉱石や原料炭価格が大幅に上昇するため、大口ユーザーへ価格転嫁できるかが利益の方向性を決めよう。転嫁までのタイムラグなどを考えると、来期の高炉は減益を予想する。
化学	 -----	 -----	石油化学事業は、ナフサを中心に原材料価格の上昇が続いているため、特に川中から川下に位置する企業群はマージンの悪化が見込まれる。電子材料では、最先端の半導体材料など高い伸び率を示す製品もあるが、化学セクター全体の利益は横ばいに留まろう。
紙・パルプ	 -----	 -----	大手各社は洋紙やダンボールなどを中心に値上げを実施済みで、今期は価格改定の通期寄与とコスト削減がプラス要因。ただし、古紙や燃料など原燃料価格の上昇が続く中、利益は横ばい圏の見込み。
建設・住宅	 -----	 -----	大手ゼネコンは採算重視の受注体制への転換を図っているが、過去の不採算受注の影響が残るため早期の利益率改善は見込みにくい。ハウスメーカーも受注が低迷しており、業績の回復は見込みにくい。全体として利益は横ばい程度に留まろう。
不動産	 -----	 -----	オフィス需給は引続きタイトで、更改賃料の持続的上昇が期待されるため、保有ビジネスは増益維持。一方、割高感からマンション市況が悪化しつつあること、流動性の低下により開発・流動化ビジネスに鈍化傾向が見られることなどから、全体では1桁の増益を予想。
自動車	 -----	 -----	新興国市場での販売数量の拡大やコストダウンによる利益の下支えは期待できるものの、利益構成比の大きい北米市場の減速や、円高、原材料価格の上昇による減益インパクトが大きいいため、全体では10%を超える減益を余儀なくされよう。
半導体・電子部品	 -----	 -----	最終製品の市場拡大や高機能化による恩恵は享受するも、需要の伸びは鈍化が見込まれ、価格動向も軟調な見通し。減価償却費など固定費負担増加のほか、円高や原料高も利益を圧迫。製品分野によりばらつきはあるが、総じて08年度は減益に転ずる見通し。
家電・AV	 -----	 -----	牽引役である薄型テレビの販売台数は拡大するも、競争激化により価格下落が厳しく、優勝劣敗が鮮明に。利益貢献の大きかったデジカメ等も鈍化。北米市場の減速、円高、資材価格の上昇等もあり、総じて横ばい圏は確保可能の見込みながら、利益モメンタムは鈍化が続く。
機械	 -----	 -----	円高、原材料高が全般に減益要因として作用するため、利益の伸びは横ばい程度に留まろう。建設機械は資源国等での旺盛なインフラ整備需要を背景に、堅調な業績拡大が続き、増益維持が可能。工作機械は外需の支えはあるが、内需の減速により、減少トレンドを描く。

(注) 水平線は経常損益ゼロ水準、矢印は今後1年間の方向感を示す。増減益は経常利益が10%以上変化することを示す。

	前回	今回	コメント
運輸	 -----	 -----	鉄道大手3社は、緩やかな輸送量増加、支払い利息減少、コスト削減等により増益が見込まれる。海運はコンテナ運賃が回復基調であるが、ばら積み船は船隊増強、市況の緩やかな下落により利益は横ばいの見通し。トラック業界は供給過多の状況に変化はなく厳しい状況が続こう。
通信	 -----	 -----	固定通信は、F T T Hの新規加入ペースが鈍化することに伴い顧客獲得費が抑制され収益性改善を見込む。移動通信は、新しい端末販売制度等の普及拡大により通話料の減少が見込まれる一方で販売奨励金が抑制される。総じて利益水準は維持されよう。
情報ソフト	 -----	 -----	システム投資は金融機関向けでピークアウトが想定されるものの、総じて堅調な推移が見込まれる。オフショアの活用等、開発効率向上によりコストが抑制されることで、利益は横ばいから微増が見込まれる。
小売	 -----	 -----	食品等の消費は底堅いが、所得の伸び悩みや競合の激化等で既存店売上に力強さはない。人手確保が困難なことから人件費の上昇が見られることや、都心部への積極出店等で、販売管理費は増加傾向。1桁後半の増益となる見通し。
食品	 -----	 -----	商品市況上昇や円安などコスト圧迫要因はあるが、概ね製品価格への転嫁が出来ており、水産加工品や食肉加工品メーカー等ではマージン改善の傾向が窺える。主力製品により多少の違いはあるが、採算の改善もあり、総じて利益は横ばいから微増となる。
医薬品	 -----	 -----	大手製薬企業は業界再編による事業拡大が見込まれる一方、企業買収による一時費用の発生、新薬開発にかかる費用の増加等により、利益は伸び悩み横ばい圏。後発品製薬企業は、政府による促進策の恩恵を受けることで底堅く推移するものと思われる。
電力・ガス	 -----	 -----	07年度は中越沖地震による原発停止や化石燃料高により大幅な減益となった。化石燃料高は、燃料費調整制度により料金単価への転嫁が可能だが、半年のタイムラグが発生すること、固定費の増加や原発の稼働率の低下から今年度も減益の見通し。
銀行	 -----	 -----	08年度はサブプライム関連・カード子会社等の一過性の赤字要因が消失するため、純利益ベースでは前期比2桁台の増益見込み。ただし、貸出ボリューム・利鞘は共に概ね横ばい推移のため、本業収益である業務純益は実質横ばい。再び政策金利が段階的に引き上げられる局面までは本格的な業績の増益トレンドは期待しにくい。
その他金融	 -----	 -----	利息返還引当金の水準が十分かどうかは当面の注目点。今後も過払利息返還請求が減少に転じない場合には、引当金積み増しリスクが存在する。加えて上限金利引下げ及び総量規制の影響も中期的に持続することから、業績の大幅な回復は見込みにくい。

(注) 水平線は経常損益ゼロ水準、矢印は今後1年間の方向感を示す。増減益は経常利益が10%以上変化することを示す。